タンザニア訪問記(2017.2.20-3.5)

訪問の目的:

・タボラで働いている娘(綾)夫婦の日常生活を当地において確かめるため。

・50 年前に、日本の教科書に「暗黒大陸」と紹介されていたアフリカが、現在どのように発展しているかを知るため。

・動物王国アフリカのサファリを旅して、自然の中で暮らしている野生動物を目の前でみること。

二月二十日の深夜、カタール航空で成田を発ち、季節風で荒れるゴビ砂漠の上空を 13 時間かけて、テニスファンにとっての悲劇の地”ドーハ”に到着した。4 時間ほど時間待ちをし、さらに 6 時間かけて、タンザニアの首都、「ダル・エス・サラーム」に到着した。人口 600 万人ほどの海に面した都市である。降りてすぐ、日本人が経営する JATA ツアーズから派遣されたタクシーが迎えにきた。そのまま市内中心部にある”Golden Tulip”ホテルに向かった。

<ダル・エス・サラーム印象記>

① 飛行機からの観ると、草原に点在する鉛色のトタンで葺かれた小さな住宅が、やがて密になり、飛行場の近くでは少し大きな建物も少し見られた。

② 最初に驚いたのは、日本の車、それも PR 用の日本語表示の車が道路を占拠していることであった。・・自動車教習所、・・学園、・・学校、・・葬儀社、・・観光、・・工業、・・産業、・・会社、等々。自動会社はトヨタ、ホンダ、ニッサン、スバル等、日本メーカーのオンパレードであった。自動車のみに目を向けると、まるで日本の街をドライブしていると錯覚してしまいそうであった。

③ しかし、通行人や自転車や進路を横切る自動者に目を向けると、日本とは全くことなる交通事情がそこに

はあった。信号がほとんどない道路を人や自転車やバイク・車が、僅かなスペースを求めて突入してくるのである。交通ルールが順守されることを前提に街を運転する、私たち日本人の運転技術では、とても目的地に車を運べないと感じてしまった。

<タボラ印象記>

①教会や博物館や主要な建物はイスラム様式が色濃く残っている。宿舎の近くには、キリスト教とイスラム教の教会が共存しており、朝早くから「お祈り」が聞こえた。

②首都のダルエスサラームより、バスで 12 時間、二日に一便の列車で 20 時間、飛行機で 2 時間の距離にあるタボラは、人口 22 万人ほどの中都市で、緑（2-3 月は雨期）におおわれていた。街中のあらゆる場所に「マンゴーの大木」が茂っており、皮膚を刺す強烈な太陽光線を遮っている。その下は涼しい。

③教会が信仰、教育、医療の中心的役割を果たしたいる。

④アフリカの中で珍しく争いの少ないタボラの人々は「ゆったり」と生きている。

⑤当地では、スワヒリ語と英語が使われている。中等教育以上では、全ての教科が「英語」で行われていると聞いた。

⑥スワヒリ語の母音（5 つ）は日本語と同じであり、会話も抑揚が少なく、穏やかな印象を受けた。「ハクナ・マタータ:問題ない」「サワサワ:OK です」「ポレポレ:ゆっくりゆっくり」が、しばしば会話の中にでてきて、この地域の人の気風を感じさせてくれた。

⑦現地の人の主食は、「とうもろこし:ウガリ」「芋:キャッサバ」が中心であり、少し高価な米が続く。肉類は高価であるので、めったに口にできない。

　外国人向けのレストランは、肉やチキンをインドやイスラム風に調理したものを準備している。強烈な太陽の下で育った、牛や鶏の肉は、おいしい。マンゴウ、オレンジ、ギャバジュースは、濃くておいしかった。

<タボラ点描>

宿舎の隣のキリスト教教会。　日曜には、ミサに大勢の信者が集まる。

z

毎日通った宿舎から食堂へ通じる道

向こうに見えるのが「教会」

「マンゴーの木の下で」は、”綾さん”が

つくった替え歌。幼児は喜んで歌っていた。

元気あふれる幼稚園児達とのふれあい　凶暴うさこちゃん

下町の教会（Salvation Army）

放牧された牛、ヤギ

全て、「マンゴーの木」

タボラ駅（内部撮影厳禁）

街の中心だった駅舎　西部劇の時代にタイムワープ

タボラのビール（どれもおいしい）

タボラのメインストリート

お世話になったアレックスの実家にお招き　父親同士!

タボラ・ユニバーシティカレッジの研究棟

学長さんと会見した。　研究・教育・留学・奨学金等、日本からの援助を要請された。

発展途上のタボラにおいては、全ての資源（リソース）が不足している。Ken の専門の教育心理学

のスタッフも十分では無いようだ。

*****　Skype や DVD を使った「教育心理学」の講義が、日本-タボラ間で実施できるのではないか******

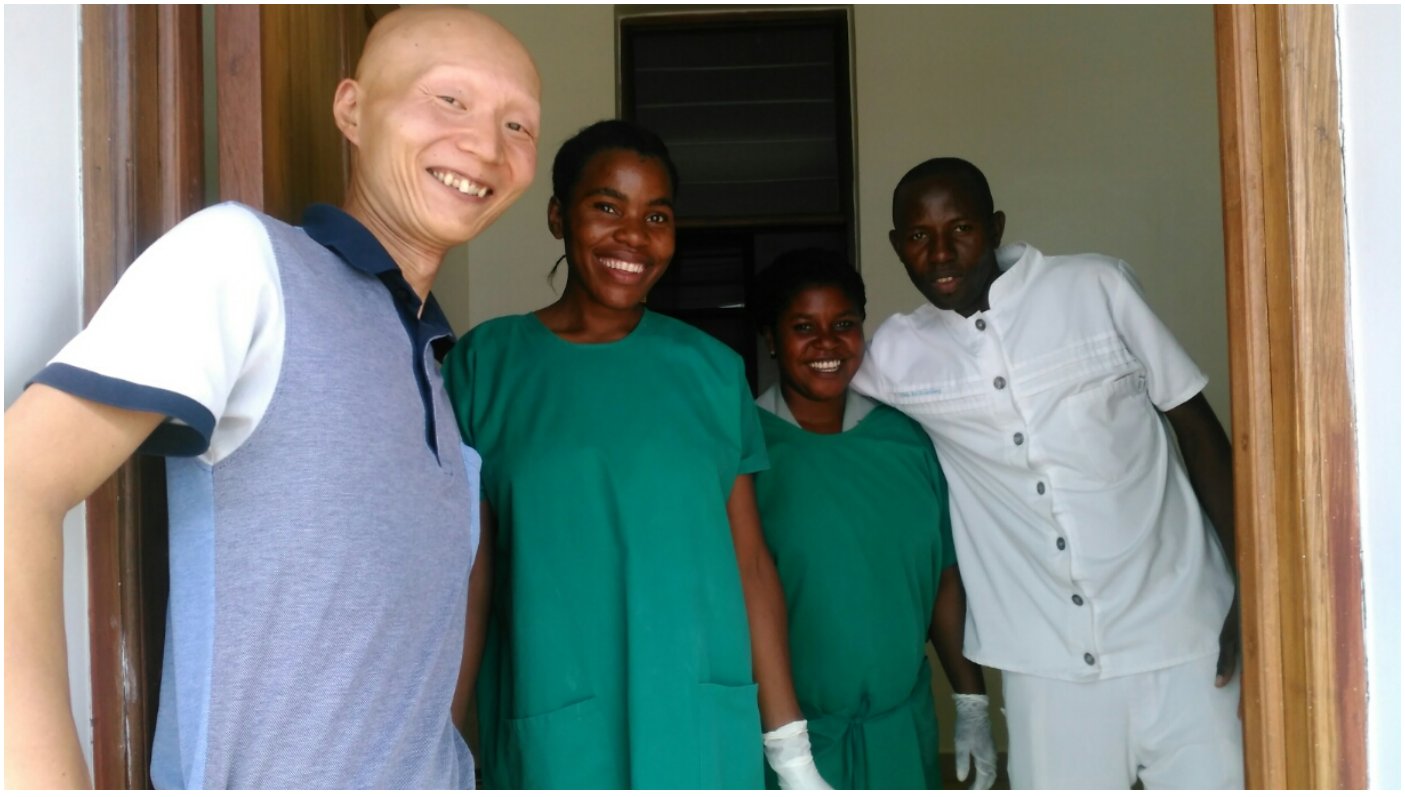
これから検討しよう。

ろう学校一年生の教室。地球のどこでも同じ教育のスタート。言葉あり　音あり　そして意味あり。

病院の看護師さんと記念撮影。娘たちがお世話になっています、これからもよろしく！

病院の通路でツーショット。一緒に頑張っているなかまです。

“風に立つメスライオン”の仕事場です。



こちらは手術室のなかまです。

最後の日の午後。宿舎横のレストランでアフタヌーンティー。雨季の終わり、吹き抜けるアフリカの風が涼やか。

タボラ郊外（　新興住宅地）

平屋のタボラ空港オフィス

空港で記念撮影

タボラの空港でお別れ　四日間一緒に過ごす時間をくれてありがとう! 二人でこれからも GO!

<ダル・エス・サラーム点描>

タボラツアー（マーケット）　存在感のあるアレックスと一緒だとちょっと怖い市場も OK。

西端インド洋を行き交う渡し船。　地元の野菜、魚すべて今日取れたもの、鮮度抜群!

ダルエスサラームの博物館前　　国旗:国民・森・海・鉱物資源を表す。

ティンガ・ティンガ小屋

巨大なマンゴウの木の下

イスラム文化の香り

やっぱり来ました大学巡り　ここはイギリスのキャンパスの香り

最高学府:ダル・エス・サラーム大学

市内（その場で焼いた肉等販売　）

ダル郊外の食肉市場　ちょっと入るとヤギがぶらーんでした。

<サファリ印象記>

①サファリへは、キリマンジャロ山近郊の「アルシャ」の街より、トヨタのランドクルーザーで出発した。この車は、荒れ地には滅法強く、橋の上で故障した車の下のＶ字に切れ込んだ小川を苦も無く、渡りきった。

②アリューシャから、「マニューラ公園」および「ンゴロゴロ保全地区」へは、高速道路が完備。日本の「鴻池建設」が工事。崩落もなく、日本の企業の仕事ぶりをサファリガイド・運転手が絶賛。

③40 度を超えそうな火口の急峻な坂をゾウの群れが塩を求めて、湖にくるそうだ。

④ゾウの親子が車の前をじゃれあいながら、とおり過ぎた。

⑤牛・ヤギ・ヒツジ追いで生計を立てていた、「マサイ族」の人々が「観光産業」に従事している。

⑥ホテル・タクシー・生産者が資金を積み立てて、環境・教育等に投資し「よりよい村づくり」をめざしている。

⑦大統領令により、マサイ族の子どもを教育するための「小学校」建てられた。

<サファリ点描>

アリュシャの博物+みやげもの店

高速道路

アカシャの枝: とげのあるにもかかわらず、ゾウの好物。

コウノトリの群れ

日差しの厳しいアリユーシャ国立公園　野生動物がすぐそこに!

フラミンゴ

カバ

誇り高いマサイの従業員と

火口の中に広がる草原と森と湖。ンゴロゴロン環境保全地域。人が住むことが許されない動物天国。

ガゼル　　ハイエナ

数日に一回の食事をする。

後は、ゴロゴロと昼寝する。20 時間は寝ているとガイドの評。

お世話になったタンザニア国内航空　プレシージョンエア。ガゼルマークが素敵。

空港の待合室にて。

何でしょう?　　これをアリが作るとは信じられない。

ライノ(犀)コテージの中。大きなテントの中にベット・トイレ・シャワーがあります。う～ん　アフリカン!

ゾウさんの親子。しっかりしつけをする賢いお母さんゾウとやんちゃなちびゾウ、

サファリカー。車の天井を持ちあげて屋根にします。こうすると立って動物たちを観ることができます。

もののけ姫に出てくるのに似てるよね。

遠くに広がるカルデラの別世界。何が住んでいてもおかしくない。

コテジの朝。庭先に訪問者あり。アフリカスイギュウの群れ。

コテージのプールサイドでごろりん。プールの向こうにはキリマンジャロの頂が顔をのぞかせています。